ロシア史研究会 ISSN 0919-990X

ロシア史研ニューズレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ

No. 84 *January 2012*

2011年度大会が閉幕

（写真は2011年度大会初日共通論題1の模様 / 梶 雅範 撮影）

2011 年度総会について

鈴木義一（事務局長）

［鈴木からの原稿］

2009/10 年度ロシア史研究会会計報告（2010.9.1～2011.8.31）［単位は円］
［添付した会計報告に従って、以下の昨年のものを入れ替えて下さい］

前年度繰越	ゆうちょ銀行定期貯金	1,354,000
	ゆうちょ銀行振替口座	6,275,465
	現金	223,014
	合計	7,993,554

2009/10 年度収支

収入	一般会員会費	1,429,000＊
	雑誌会員会費	109,500
	雑誌売上	92,100
	情報学研究所	151,498
	広告収入	105,000
	みずほ銀行利子	57
	合計	1,887,155

支出

ＮＬ関連	357,827
雑誌印刷・発送	326,787
名簿関連	52,905
例会関連	9,300
会計関連	66,133
事務局関連	6,889
各種会費	45,080
大会関連費	38,593
合計	903,514

大会関連費（09/10 年度）　-38,593

収入		支出	
非会員参加費	0	バイト代	66,120
懇親会費	286,000	懇親会費	286,000
祝金（日ソ）	10,000	食事代	8,260
祝金（ナウカ・ジャパン）	20,000	事務	9,248
雑誌売上	0	会場代	57,600
大学補助金（法政大学）	100,000	看板作製・設置	26,000
		銀行振込手数料	1,365
計	416,000	計	454,593

次年度繰越

ゆうちょ銀行定期貯金	2,354,000
ゆうちょ銀行口座	3,791,580
ゆうちょ銀行振替口座	2,406,980
みずほ銀行普通預金	385,264
現金	39,371
合計	8,977,195

前年度繰越＋収入＝支出＋次年度繰越＝　9,880,709
2009/2010 年度の収支（次年度繰越-前年度繰越）983,641 の黒字

＊2009/2010 年度一般会員請求額 1,480,000、納入額 1,282,000
A 会員 133 名（8000）、うち家族割引 1 名（4000）、委員割引 12 名（3000）、休会 1 名
B 会員 132 名（4000）、うち家族割引 4 名（2000）、委員割引 3 名（0）、休会 5 名

本頁は、一般公開のために編集されました（2018年10月13日）。
会計監査委員による監査の結果、問題ないことが承認されたことが掲載されています。また、会計監査報告原本は、事務局に保管されています。

＜2011年度大会印象記＞

中村裕（秋田大学）

今回はロシア史研究会とロシア・東欧学会の大会の日程が重なっていたため、初日のスケジュールにはフルタイムで参加することができなかったので、2 日目のパネル「日露戦争とサハリン島」と共通論題 2「戦後 66 年シベリア抑留を問う: 急がれる公文書開示と実態解明」に参加したことで得た印象を記すことにしたい。

パネル「日露戦争とサハリン島」は、既に原暉之編『日露戦争とサハリン島』北海道大学出版会、2011 年として出された成果を踏まえて、3 件の報告・問題提起が行われた。

1875 年の樺太・千島交換条約でサハリン島は、ロシア帝国の管轄下に入り、流刑地として位置づけられ、日ロ戦争時にはロシア帝国内での唯一の戦場となり、ポーツマス条約によって南半分が日本の統治下に置かれた。天野報告「帝政期サハリン島の地域構造と戦場の諸相」は、サハリン戦におけるロシア側の戦死者がロシア帝国参謀本部の公式戦史で 88 人と記載されているが、公式の戦死者に数えられない見捨てられた死者の存在したことを指摘する。そしてロシア帝国によって見捨てられ、逆に日本側が「われわれの土地」と見なしていたサハリン島のおかれた位置を明らかにしている。田村報告「日露戦争とサハリン先住民・樺太アイヌ」は樺太・千島交換条約によって北海道に移住したものの、再度ロシア領サハリンに戻った樺太アイヌが置かれた立場をポーランド人の民族学者、ブロニスワフ・ピウスツキの叙述等も利用しつつ描き出している。その先住民の国籍に関してポーツマス条約では何も決めなかったという点は、当時の国家のマイノリティに対する対応を如実に物語っている。原報告「サハリン難民とロシア政府の救恤政策」は、日本軍による島の「無人化」工作の結果としてのサハリン難民の発生、それに対してロシア政府が非軍人のエリートをも動員して救恤政策で対応せざるを得なかった 20 世紀の戦争としての日露戦争の意味合いを明らかにした。筆者の守備範囲の点で、一挙に理解することは困難であったが、3 報告の趣旨は明瞭で、文字通り勉強させてもらった。

シベリア抑留は周知の事実であり、それに関して語られている内容は決して少ない訳ではない。しかし、今回の試みは、抑留体験者、日ロの研究者、ジャーナリストが一堂に会して、抑留問題を総合的、学術的に捉えていこうとする注目すべきものであったと言えよう（司会進行役

の富田氏から、「シベリア抑留研究会」が発足したことが紹介された)。
当日富田氏によって配布されたシベリア抑留の研究の現状と課題に関する資料、1945 年の日本人捕虜に対するソ連国家の政策に関するクズネツォーフ報告、シベリア抑留者の三重苦(飢え、酷寒、重労働)に関する阿部報告は、筆者のような門外漢がシベリア抑留の全体像に関して理解するのに貴重であった。また、ロシア国立文書館の史料を利用して研究の成果の一端を発表した小林報告には、力強さを感じた。筆者はシベリア抑留者の間での民主運動をソ連当局の一方的な操作によるものと理解していたが、問題はそれほど単純ではないことを知ることができた。更にこの問題に関しては、旧軍の秩序に対する民主化という側面を指摘する議論とソ連当局による操作、抑留者の間の分断・対立を指摘する議論とが体験者自身から出され、共通の土台を創っていくことの困難さを実感させられた。栗原報告は、引き上げ後の抑留者の声・要求をマスメディア、政府、司法が切り捨ててきたことについての、『シベリア抑留―未完の悲劇』岩波新書、2009 年で提起した問題を改めて指摘した。村山報告(「抑留研究の共通ベース:用語と資料」)では、日本人が抑留された地域はシベリア、極東だけではないことが指摘され、更に自身の抑留者としての個人台帳・『登録簿』の提示によって、抑留の実相が改めて浮き彫りにされた。
自らの抑留体験とその思いを伝えたいと願う体験者の思いとシベリア抑留の意味を歴史研究のなかで明らかにしようとする研究者の狙いは必ずしも予定調和的なものとなるとは限らないとしても、それぞれの問題意識をつきあわせることができたという意味で、意義のある企画であったと言える。

(写真は2011年度大会二日目共通論題2の模様 / 梶 雅範 撮影)

麻田雅文(首都大学東京 PD)

「ロシア史」の醍醐味の一つは、アジアからヨーロッパに跨った、他国に類を見ない広大な空間を有することにある。今大会でも、その広がりを強く感じた(以下、発表者の敬称と副題略)。
自由論題で拝聴したのは、左近幸村「日露戦争後の義勇艦隊と東亜汽船」と、エレーナ・ドミートリエヴァ「在満白系ロシア人中学校への『新学制』導入問題」である。前者はグローバル・ヒストリーを意識した報告で、日露戦争後に極東の海運で損失を重ねた各社が、ロシアからアメリカへの移民に目をつけ、大西洋航路に力を入れる過程を描く。後者は、満洲国下でも正教に基づいた「神学」の授業を残そうとする白系ロシア人と、廃止しようとする満洲国の確執を論じた。従来の「ロシア史」の枠組みを脱構築する両名の研究が、今後どのような形でまとまるのか、興味が尽きない。なお、藤沢潤「「ブレジネフ外交の岐路」と瀧口順也「ボリシェヴィキ党大会(1927−1934)」について言及できないのは、ご寛恕願いたい。
本会で最も伝統あるヨーロッパ部の研究では、共通論題 1「ロシア農奴解放 150 年」で、節目を迎えた農奴解放が俎上に上がった。吉田浩「農奴解放の開始から大改革へ」は、解放の原因について、皇帝の個性が強調されてきた従来の解釈が後退し、経済的失政をカバーするため農奴解放が政策化された、との見方を示した。青島陽子「改革期の農民観」は、解放された農奴を国民に「改造」する手段として、いかに教育に期待が寄せられたかが論じられた。イーゴリ・フリストフォロフの「農奴制廃止と農村の課税」は財政面を扱い、解放農民に対する税制

の構築が成功せず、公権力の強化につながらなかった点を論じた。農奴解放と翌年の合衆国での奴隷解放を比較する会場の質問に、彼が、南北戦争のような流血を伴わなかった大改革を評価したのは興味深かった。今回の議論も踏まえて、農奴解放や大改革といった、国内でも十分な議論の蓄積があるテーマについては、2015 年の ICCEES 東京大会を見据えつつ、世界へどう発信するかが問われよう。

一方、「ロシア史」はヨーロッパ部だけで派生するのではないことを証明したのが、二日目のパネル「日露戦争とサハリン島」である。辺境の島、というイメージが国内ですら強かったサハリン島は、短期間ながらも日露戦争で最前線となる。天野尚樹「帝政期サハリン島の地域構造と戦場の諸相」は、日本軍が捕虜を虐殺した背景を論じた。日本軍が島民を蔑みつつ戦闘に臨み、ロシア人義勇兵も、流刑制度が内包した「身分」の違いで防衛体制を構築できなかったことに、惨劇の原因を見出す。田村将人「日露戦争とサハリン先住民・樺太アイヌ」は、日露戦争前後の「先住民」移動の連続性を指摘した。日露両国の勝敗にこだわりがちな言説を相対化する、「先住民」の視点からの報告で、この戦争の多義性を再認識した。原暉之の「サハリン難民とロシア政府の救恤政策」は、戦中、日本軍によって行われたロシア人の強制追放と、そのご彼らがロシア帝国に求めた補償の帰結を論じた。戦争による民間人の被害について国家は無答責だったものの、日露戦争後にロシア帝国が補償に応じていたのは、「シベリア抑留」へと連なる論点であった。

共通論題 2「戦後 66 年シベリア抑留を問う」には、150 名近い参加者があり、高い関心がうかがわれた。セルゲイ・クズネーツォフ「日本人捕虜・抑留者に対するソ連の政策」は、国際社会の目を気にしてソ連が抑留者の扱いを微調整していたとし、国際的な視野を提示した。阿部軍治「抑留者たちの“三重苦”」は、先駆的な業績を有する発表者によって、抑留者の辛苦が代弁された。死亡者名簿を作成した村山常雄は、抑留者の統計的な考察を発表し、死者の多くは 20 代前半の下級兵士であったことを示した。抑留された地域はシベリアだけではないため、ソ連による、という意味で「ソ連抑留」に改めるべきだ、との指摘は真摯に検討すべきではないか。小林昭菜「ロシアの公文書に見るシベリア民主運動」は、抑留者の間で吹き荒れた「民主化運動」がソ連当局の巧みな誘導の下にあった、とモスクワの一次史料から実証した手堅い報告であった。栗原俊雄「引揚げ後の抑留者たち」は、生還しても近年まで補償もなく、名誉も回復されなかった抑留者に報いるためにも、実態の解明に尽くす意義を説いた。筆者は、「シベリア抑留」で見られた悲劇の多く（栄養失調、強制労働など）は、30 年代のグラーグ管理に起因する、と見ている。日露史上の悲劇の一コマではなく、「ロシア史」の中で抑留を位置づけ直す作業は、本会としては避けられない課題であろう。

冒頭で触れた「ロシア史」の醍醐味は、裏を返せば、無限の広がりを持つロシアは、一地域だけ見ていても語り尽くせないことも意味する。今後とも扱う地域の違いを越え、
相互の知見を交換し合う場として、大会が機能し続けることを願ってやまない。

最後になったが、大会のあらゆる場面を支えて下さった村知稔三先生を始めとする開催校のスタッフの皆様に、厚く御礼申し上げる。

（写真は2011年度大会初日青山学院アイビーホールでの懇親会集合写真/ 梶 雅範 撮影）

「サハリン」感想と震災報告

金野　文彦（宮城県在住会員）

小中学校の社会科教科書を読んでいると、「北方領土」は強調的に記述されていますが、樺太―サハリンや千島列島は脈絡がつながらないものとなっているように思えます。ある時は日本・ある時はロシアとなり、「固有」とは言い難い存在でしかありません。ましてやそこに生活する先住諸民族は一顧だにされていません。

日露戦争では、「日本海海戦」や「旅順戦」は強調されても「サハリン島」のことはどれくらいの比重で目を向けられていたでしょうか。原暉之氏らの「日露戦争とサハリン島」と云うテーマは、この問題を見直していく上での大きな仕事だと思いました。

日露戦争後１００年であっても、激戦と勝利の記念碑が日本各地で見直されぬまま、厳然とあることや、直接にこの島で銃火を交えた三つの戦争の過去を見ないことが、未だ「壁」を越えての現在の日ロ関係へと引きずった遠因となっているのではないでしょうか。

天野報告で丁寧に後づけられた、サハリン島の流刑地としての位置や流された人々への扱いは、そのまま「シベリア出兵」と日ソ戦争でのアイヌ人や朝鮮人などの運命の原型ともなっているように思えます。

原報告は、「救恤」という視点から日露戦争とサハリン島の実相を描いてくれました。近代の戦争は、徴兵制で国民を戦争に動員していく以上、戦死者や傷病者への救済や補償を準備してかなければなりません。ただし、それがどのような性格をもつかということで、「戦後」や次の戦争の準備と動員が違ってくるのでしょう。

北海道と近接し、で日本と「ロシア」の間で銃火を交えたこの島のことと三つの戦争の実相を今以上に解明していくことで、狭い四島のみならず二つの国家と民族の関係をより全面的に多岐に描いていくことができることになるのではないでしょうか。

さて、今回の大会には東日本大震災の被災地からの報告をすることも意図して参加したしました。震災当日、私は勤務地・住まいともに内陸部ですので、被害は軽微でした。それでも、ライフラインが全面停止したので、生活は大変で情報からも全く隔絶されていました。沿岸部の被害状況は、断片的にしか入ってきませんでした。

ライフライン回復後、ビデオで石巻の旧北上川に大津波がものすごい勢いで逆流していく様を見て、中瀬（なかぜ）にあるハリストス正教会旧会堂は絶対に助からないと感じました。その後、ともかく助かったという情報を知り、確認に行かなければならないと思いがこみ上げてきました。傾き壁に大きな穴があいている旧会堂を見て、よくぞ耐え残った奇跡だという言葉が浮かびました。周囲の防護柵と植木が折れ曲がっているのを見て、再度津波の威力を実感しました。

他の日ロ関係の史跡では、「シベリア出兵」期の反戦活動家・佐藤三千夫の記念碑は無傷でした。現在のハリストス正教会の建物は、石巻・金成両教会に十字架が折れるなどの被害を受けていました。金成の教会は、近くの鈴木文治の碑共々早くに修復されました。また、宮戸島にある漂流民の墓と記念碑は、海岸から移設されたのと津波の及ばない高さにあるので無事でした。引き続き、会員の皆様には被災地への支援をよろしくお願いいたします。

（中瀬にあるハリストス正教会旧会堂/ 著者撮影）

事務局からのお知らせ
［2012 年の大会についてなど］

ロシア史研ニューズレター
第84号　2012年1月 日発行
編集・発行　ロシア史研究会委員会
〒162-8601
東京都新宿区神楽坂1-3
東京理科大学理学部第一部教養学科
池田嘉郎研究室気付